題字　福井大学長　清　水　英　夫

No. 2　1972. 3. 31　福井県図書館協会報　福井市宝永3丁目・県立図書館内　県図書館協会発行

雑　　感

副会長　加　藤　三　千　夫

大学図書館は各科学分野における研究の基地として国の繁栄のために力になったであろう。また将来ますます縁の下の力持ちと言った形で国民の幸福に寄与する原動力につながるものと考えられる。

ここで図書館の立場から過去の処遇を考えてみるとほとんど冷遇という言葉につきるのではないだろうか。グーテンベルグが印刷技術を開発してから図書は急激に出版されたと思うが、その時代の図書館と現在の図書館との設備上の差はもちろん、人々の図書館にたいする姿勢も変化していないのではなかろうか。このようなことは他に例をみない珍らしい現象であろう。

国の繁栄以前の研究段階において図書館の諸設備は充実され、特に機械化が進行しコンピュータ等の活用は全国大学図書館ですでに利用されていなければならなかったものと考える。すなわち、現段階では図書館の図書以外の諸設備は完備していなければならなかったはずである。

一般論として、入庫を許可されている利用者は必要な図書の必要な部分を複写器でコピーするだけで、その図書は直ちに書庫へ返される。図書そのものを座右に置く必要がなくなってきた。

すなわち閲覧室は開架図書、参考図書類を閲覧する場所に限定されてくるようである。

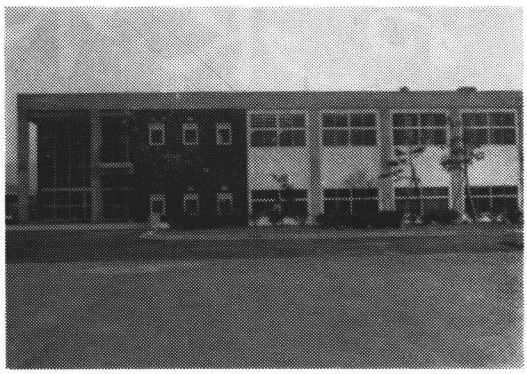
図書の閲覧利用のほかに図書館の役割りとして蔵書を完全な形で保管することがある。すなわち書庫利用の容易さ、多数の図書保管および図書の出し入れの便利さが問題となろう。

現在産業界の部品倉庫では種々雑多な種類の部品が倉庫に整理保管され、1人のオペレータのプッシュ　ボタン　システムで必要な部品を倉庫内の必要な場所まで運搬してくれる。限られた大きさを持つ図書に、またすべて背番号を有する図書にこの方法がなぜ利用できないのであろうか。特に将来図書がマイクロ　フィルムに写し替えられた場合にはさらに以上の方法が容易にできるのではなかろうか。これには理論はない。予算さえあれば比較的簡単に1冊ずつつかみ出してくれる装置はできるのでないか。郵便番号を読み取り、行き先き別に分類している時代である。

コンピュータに図書の所在を記憶させて活用するのもおそまきながらいくつかの大学では軌道にのってきている。これと並行して図書を検索し運搬してくれる装置も将来のビジョンとして望むところである。

（福井大学附属図書館長）

福井工業高等専門学校図書館の紹介



昭和40年、本校が創設されて早くも7年が経過した。この間に土木工学科を増やし、施設の整備をほぼ終わったが、殊に今年の春完成した図書館は、本校文化活動の中心的施設であり県内学校建築の中でも特異な存在として誇るに足るものである。

ここに、施設と併せて本校図書館の概略を記し、参考に供したいと思う。

図書館建物

建物を総称して「青武台会館」といい、鉄筋コンクリート2階建、延1653.8㎡（1階1005.28㎡、2階648.52㎡）で1階は共用施設および管理部分、2階が図書館施設となっている。

1階には、ホール、展示ホール、ラウンジ、食堂、セミナー室（大小3室）、売店、視聴覚ホール、放送映写室、VTR調整室、管理室（学生課）および空調機械室がある。

視聴覚ホールは面積276㎡、スライデイレグウォールによって1と2に分けられ、1はフラットな床で、奥行5.5m、巾7mのステージが付属し、会議、集会等に使用でき、会議用卓子16、同椅子48、パイプ椅子300を設備してある。2はスロープのある床で、劇場用固定椅子180席を備え、1と2を同時に使用すると450名を収容できる大ホールとなる。

このホールの視聴覚設備としては、ステージに、垂れ幕、引幕、巾6.3mの原動スクリーン、スライド用透視スクリーン（縦横1.8m）レクチャーテーブル(マイク設備、ワイヤレスマイク設備がある)、前面ソノラインマルチスピーカー（2）、リモコン式ロータリーマガジンスライド映写機、リモコン制御盤があり、その他暗幕設備、天井スピーカー（4）、電動スクリーン(巾4.5mで2のみ使用の場合に用いる）がある。

放送映写室には、16㎜クセノン映写機2台、8㎜トーキー映写機1台、音響装置一式（全校放送用で管理室においてリモコン使用)、リモコン制御装置があり、これらの設備は映写室、ステージ両方においてリモートコントロールできるようになっている。

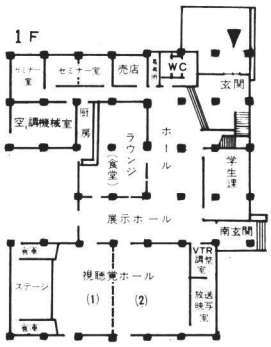
以上の設備をもっているので、学校行事、学生会活動、図書館活動等において、映画、講演、レコードコンサート、演奏会、集会その他多人数集会行事に使用することができる。

また、VTR調整室には3ch同時送り出しの可能なカラーVTR調整卓を設備し、カラー電子編集VTR、カラーカセットVTR、カラー特殊効果装置、テレビカメラ等により、録画、編集も可能である。

この設備は、本校教育方法改善の一手段として設備しさらに拡充を図る計画であるが、本校校舎全域にわたって、教室および実験室に授業時間の中途において、即時にテレビ映像音声が利用できるよう完全な配線がなされている。

2階には、図書館ホール、新聞コーナー、出納目録室、ブラウジングルーム、閲覧室、オーデオルーム、事務室、書庫等がある。

閲覧室（283.5㎡）は開架方式で、約2.5万冊の収蔵が可能であり、閲覧机（60席）キャレルデスク（16席）のほか、参考図書コーナー(6席）産業資料コーナー（12席）がある。また、閲覧室には明室用視聴覚設備（エルモAVシエル）が設けてあり、授業にも利用できる。書庫(68.0㎡)は約3万冊の収蔵が可能である。



オーデオルームは図書館の新しい行き方を示すもので、A室はカラーテレビ、カラーカセットVTRにより録画教材を、またスライド視聴設備によりカセットテープをセットすれば自動的に説明を聞き

ながらスライドを見ることができ、B室では、テープレコーダー、レコードプレーヤーをセットしたブースでヘッホンを使用し、語学用その他の録音教材およびレコードを聞くことができる。そのほか、出納台において、電子複写機による文献複写サービスを行なっている。

図書館概要

以上建物の説明で述べてきたように、本校図書館では近代的図書館の集約的な形として小規模ながら十分な設備を有し、利用される図書館であることを目標としており、そのために完全開架方式その他に気を配っている。特にオーデオルームは新しい試みであり、今後視聴覚資料の充実に努力していく必要がある。

◦蔵書冊数　(46年度末現在)

	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	合　計
和　書	982	496	1,480	1,100	4,550	4,814	124	686	970	1,657	16,859
洋　書	187	185	77	40	2,135	234	0	34	527	368	3,787
合　計	1,169	681	1,557	1,140	6,685	5,048	124	720	1,497	2,025	20,646

◦雑誌種類

和雑誌　438種
洋雑誌　87種
計　525種

◦利用状況　46年度

開館日数 265日　入館者数　56,515人
(1日平均 213人)
館外貸出冊数　17,972冊(1日平均67.8冊)
館外貸出者数　12,657人(1日平均47.8人)

図書館の運営

図書館業務は事務部学生課の所管で、図書係4名がこれに従事している。従って人員が少いのでできるだけ合理化、省力化を図っている。

図書の選定、運営上の基本問題等については図書館委員会(構成員7名)がこれに当っている。

図書館予算は、図書購入費(新聞、雑誌、視聴覚資料を含む)約250万円、図書館維持費(光熱水料、通信費等を除く直接的経費)約100万円(以上年間)であるが、図書購入費は、学生用の一般教育図書、専門図書、参考図書購入のために使用され、教官研究図書は学科経費により年間約350万円をすべて図書館で発注整理している。これらによる年間増加冊数は約3000冊である。

目　録

本校開設以来目録の整備には努力しており、現在事務用目録のほか、閲覧用目録(開架方式のため一般的には使用の必要がない)として、件名、著者名、書名の3種カード目録を整備しており、また毎年1回「福井工業高等専門学校図書目録」(B5判約60頁)を発行している。また本年は、図書館落成を記念して「雑誌目録」の発行を準備中である。

むすび

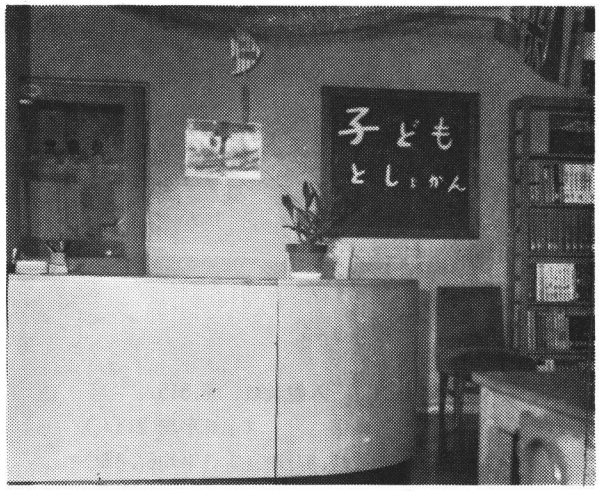
本校図書館では、学生および教職員の利用のみでなく、相互利用や一般市民の利用にも便宜を考慮しているが、創設後日が浅いため十分な資料がないこと、学校の性格上、工学および自然科学関係の図書が多いことなどから当面はあまり期待されない。しかし、今後はできるだけ地域社会の中の施設として一般の図書館活動に協力していきたい所存である。

また、郷土関係の出版資料についても極力蒐集を図っているので、できる限りご協力をお願いしたい。

図書館だより

ことしの小浜市立図書館

小浜市立図書館



小浜市では、昨年（46年）11月、文化会館が落成した。

市立図書館に併設されていた中央公民館が、この文化会館へ転出することになり、市文化会館の新設を契機に、市立図書館が待望していた独立館となったわけである。

もともと昭和35年に、独立の図書館として計画建設されたのであるが、当時中央公民館が老朽化していたため、併設をよぎなくされた。

以後、十年あまり、図書館が最初の計画にあげていた児童室も、公民館の事務室に使用される結果となった。

出版界では、最近とみに、児童の読み物が多く出版され、公共図書館においても、児童のための奉仕活動が重要視されるようになってきた。

その時機に、公民館の転出で、当初図書館が児童室に予定していた部屋が、図書館の手にもどってきた。

時を同じくして、郷土出身の童話作家山本和夫氏が児童文学関係の愛蔵書900冊を、ご寄贈くださるという、ねがってもない、ありがたい話が実現して、子ども専用の児童室が誕生したわけである。

4月1日から開室した、この児童室は、連日、市内の小中学生でにぎわっている。

図書館にとって、もうひとつ特筆すべき、今年度のできごとは、47年度において書庫の建設が計画されていることである。

書庫については、これも図書館設置当初から必要性がさけばれていながら、種々の理由でのびのびになっていたのであるが、ようやく実現のはこびとなったわけである。

戦争中、旧藩主酒井家より、小浜市が寄贈をうけた古書を、図書館で管理しているのであるが、三万余の古書の完全な保管となると場所や管理の面で多額の費用が必要でありながいあいだ、市庁舎三階に不完全な管理のままおかれていた。

30年余りにわたる年月が費やされたが、ようやくこの酒井家寄贈本を完全に保管できる書庫の建設が実現することになった。このことは、小浜市立図書館にとって飛躍的な年であるといえるのではないかと考えている。

書庫の規模は、延面積104㎡、将来、各階を各二層式にして、最終的には、四層式書庫の計画である。

以上のことは、いわば図書館として、すでに整備されていなければならない問題であり図書館の奉仕活動以前の問題のように思われる。他市の図書館にくらべ基礎づくりが、あまりにもおそすぎたのではないだろうか。

こうした諸施設がととのうことによって、図書館の本来の活動が可能になってくるのではないかと考える。この点からながめると、小浜市立図書館は、設置されて、十余年を経てようやく、図書館活動の緒についたともいえるのではないだろうか。

図書館だより

三　国　か　ら　・・・・

■ 新図書館建設工事はじまる

三国町立図書館は、昨年11月以来、社会福祉センターに引越して業務を続けているが、もとの中央公民館跡（台16番地）に、総工費7,000万円を投じて新図書館を建設することになり、その工事が4月上旬に着手された。本年九月中にしゅん工の予定であるが、でき上がる新図書館の規模は次のとおりである。

▶**建物**　鉄筋コンクリート3階建・延べ床面積1,037.57平方メートル

- 1階　閲覧室・児童閲覧室・新聞雑誌閲覧室・事務室・開架式書庫など
- 2階　学習室2・講議室兼閲覧室・郷土資料展示室・開架式書庫・閉架式書庫など
- 3階　大会議室・和室2

■ 移動図書館車5月から巡回

町民の読書意欲を高揚し、図書借り出しの便を図るため、移動図書館車(くずりゅう号と命名）を、約280万円で購入したが、いよいよ五月から町内各地区を巡回することになった。

この車は、マイクロバス型で約1,200冊の本を積み込むことができる。巡回して駐車する場所（ステーション）は、なるべく住民の要望にそうため、各公民館長や区長と相談して、目下その選定と巡回日程の決定を急いでいる。

■ ブラウン方式に

図書の貸出しが、これまで煩雑で非能率な点が多かったので、今後徐々にブラウン方式に改めるため、目下その検討をすすめている。

福井県図書館協会の歩み

昭和46年

7・9　理事会（図書館法の改正問題について）

7・23,24　子どもに対する読書指導講習会　講師・小河内芳子氏（福井県労働福祉会館）

8・3　理事会（図書館法の改正問題について）

8・21,22　県下読書グループ指導者講習会（芦原青年の家）

11・7　第9回福井県本を読むひとたちの集い（敦賀市文化会館）

12・17　理事会（昭和46年度福井県図書館活動研究大会の開催について）

昭和47年

1・21　福井県図書館活動推進大会学校図書館部会の打合会（福井県立図書館館長室）

2・15　福井県図書館活動研究大会分科会運営打合会（福井県立図書館館長室）

3・5　昭和46年度福井県図書館活動研究大会（福井県県民会館）
講演・金田一春彦氏「日本語と日本人」
第1分科会「推奨図書の選定と普及について」　第2分科会「郷土資料の収集と利用について」　第3分科会「読書活動と組織化について」
第15回読書感想文県下コンクール表彰式

3・27　昭和46年度県下図書館関係職員研修会（福井大学附属図書館）

福井県図書館協会役員名簿

会長	福井県立図書館長	朝日岳乗	
副会長	福井大学附属図書館長	加藤三千夫	
	福井県学校図書館協議会長	中山弥	
	武生市立図書館長	糀谷隆三	
理事	三国町立図書館長	荒川渉	
	福井市社会教育課図書室	坂野睦男	
	福井県立図書館次長	印牧邦雄	
	三方町立図書館長	河原繁太郎	
	敦賀市立図書館長	小和田金一	
	福井工業高等専門学校　事務部長	田中敬次	
	今立町立花筐図書館長	市橋甚助	
	福井大学附属図書館　事務長	瓜生守邦	
	福井県学校図書館協議会　事務局長	中野信夫	
	福井工業大学附属図書館長		
	農業短期大学副校長	松崎利夫	
	福井県学校図書館協議会　副会長	吉田政敏	
	鯖江公民館長	若泉喜一	
監事	大野公民館長	永見繁雄	
	仁愛女子短期大学附属図書館長	福原一来	
	福井県議会図書室調査課長	山本清	

第15回　県下読書感想文コンクール入選作

知事賞（婦人の部）

中村久子著

「こころの手足」を読んで

助田小芳（主婦）

「こころの手足」とは何のことか、満足な手足を持っている人たちには　わかりにくいことであろう。「こころの手足」とは著者中村久子さんによってのみ語られる言葉であろうから。

この本を読み終えた時、わたしは深い感動で、しばらくはそのご本を押しいただいたまま身動きも出来なかかった。

この手、この足、と思っていた四肢は、手首、足首、指、と揃ってこそ手足の働きをすることを知り今更のように愕然とした。

中村久子さんは、明治30年11月25日飛騨高山で生まれられた。3才のとき突発性脱疽という病気になり、4才のとき両手両足を切断された。7才の夏おとうさんを亡くし大正5年30才で自ら見世物小屋に売られ、以後22年間見世物芸人として生活された。

不具者という烙印と貧しさと、そしてつぎつぎと失なわれていく肉身。父・弟・母・祖母・2人の夫・みどり児、この世に苦しみと悲しみを味わうために生まれてこられたような方である。

「見世物小屋の芸人であっても、泥中の蓮にならな

くてはいけない。泥の中にいても泥に染まらない精神を持たねば、真の人間とはいわれない」と、名古屋の宝座でめぐり会った青年書家（のちの沖六鳳氏）に励まされ、泥中の蓮になるべく血みどろの努力をし精進された。

一日の学校生活もない久子さんが　口で和歌をかき編物をし　絹物の着物すら仕立て上げる。それは〝だるま娘〟と呼ぶには、あまりにも尊い姿でなかろうか。

『業のある間何十年でも見世物芸人でいいではないか。やめろと仏様がおっしゃる時がきたら歩めさせてもらえばよい。こなかったら業の尽きるまで芸人でいよう。こう決心がついたら煮えたぎっていた〝るつぼ〟が〝るつぼ〟でなくなりました。』

業の尽きるまで――とは何という恐ろしい言葉であろう。宿業というものの、この動かし難いもの、どのような智恵も分別も間尺にあわぬ、どうしようもない重みを、今は淡々と言われる久子さん。

生を受けて以来、貧困・侮蔑・愛憎・死別と苦悩の連続のなかに生きて、否応なしに生きて、そのなかから生れでた、これこそ本ものの言葉であろう。そしてがむしゃらに只管に生きてきた――と、自負していたことは、実は目に見えぬ大きな力に生かされていたのだ、と気づき謙虚に語られる久子さん。

しかしそれを語られるまでには長い年月があった。若くしてつぎつぎと死別された２人の夫には、ひとりずつの子どもがあり、生活の重荷は四肢のない肩に喰込む。なつかしい母、いとしい弟、大事な祖母たちの死目にも会えず、心ゆくばかりの介抱も許されない篭の鳥の芸人生活。子どものためにも一日も早く抜け出たい芸人生活であったが、それより以外に生活の道は立たないのだ。

悲しみと焦操のなかにも、２人の子どもは心の灯であった。手足のない私に、手足のある子を恵まれた一と、吾子を拝み、そのことによってもまた、手足のない自分を苦労して育てて下さった父母の恩をしみじみ偲ばれる。

『その昔、私の父は私の病いを癒したい親心から天理教に入信されたが、天理教の神様は、父を早世させて私の手足は治して下さらなかった。後年このことにいい感じを持たずに過しましたが、ある日ふと思ったことは、果してご利益はなかっただろうか。いいえ立派にあったのです。なぜなら50何年か前に、亡き父が火の玉のようになって祈りつつ願いを神様にかけて下さった時、両手がもどり痛みも苦しみもなくなっていたら、一体わたしはどんな心で今日まで生きてきただろうか。苦しい時、悲しい時、神や仏に無理な祈りや願をかけることが当然なこと、また宗教とはかかるもの――と自他共に許して、真実を求めようとしなかったに違いない……』

思えば祈り願いも聞き届けられなかったればこそ、本当の自分、宿業のままに生きる自分を見つけることが出来たのだ。それがご利益であった――と、喜こばれている。

〝手足のない自分のこのからだ〟こそ、最高の善智識であった、と、生かされている大きな世界を知り、語り、障害者たちの心のよりどころともなられた。

逆境の中で喜びを見つけていける日ぐらしの有難さ。生前私は一度もお目にかかる御縁を持たなかったけれど、このご本に脈打っているお言葉をぢかに聞く思いであった。

そして口絵の丸太のような両手を下げたお姿は、まさしく光顔巍々（こうげんぎ）と輝いて微笑まれているようであった。

（鯖江市柳町２丁目４の４）

知　事　賞（青年の部）

吉田兼好編

徒然草を読んで

吉田利子（高校生）

「つれづれなるままに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」言うまでもなく「徒然草」の序段である。この序段だけはずいぶん小さかった時から知っていたような気がする。本文は残念な事に教科書が初めてであったが、今でも本文に接した時のなんともいえない感動を覚えている。長い時代を越えてもなお絶えず人の心を打つすばらしい魅力がある。友人はこの「徒然草」を好む私を、固苦しいとか古臭いとか言う。確かにそのとおりかも知

れないが今はこんな時代であるからこそ見直さねばならないものとか一つの手本にすべきものとかが、数多く含まれていると思う。

私の読んだのは受験参考書的なものであって、百十にわけた本文に要旨、語訳、通釈、探求、それに練習問題がついている。3冊持っている中で一番本文が多く、語訳、通釈があっさりしているのを選んで読むことにした。それほど厚い本でもないのにかれこれ2ケ月もかかった。読みづらい古文で書いてあるので、最低2、3回は読まなくては大体の意味もとれないのである。1日に1、2段ずつ読んだ。

作者、定説吉田兼好は、私が3番目に尊敬する人である。彼の生きた時代はわが国の歴史の上でも特に動乱の激しい時代のようである。だがこの書はそんな時代性をあまり感じさせない。いかにも出家者らしい落ちついた人間観、人生観で満ちている。

「徒然草」を読んでゆくと、出家に関する記事が比較的多く、又出家者の道に入った者の生々とした喜びによって筆を執っていると思われ、静かな中にも一種の若さのようなものがある。ところが彼が出家したのは、なんと40歳すぎであるということだ。このころの出家生活は自由な隠居生活のようなものだったのだろうか。また彼の出家の原因としては一説に失恋というのもあるようだ。これはまったく意外なことである。

読み進んでいるうちに論旨に多くの矛盾があることに気づいた。一方に飲酒のあさましさが述べられているかと思うと他方に飲酒の妙味が説かれている。一方に恋愛の意義が説かれているかと思うと、他方にその恐るべきことがのべられている。世事の一切を捨てよと説く反面に衣食住や所持品に関する興味が述べられている。これらの矛盾は一体何を意味するのであろうか。若し究極まで、それが矛盾であるとしたら、我々は遂に兼好の思想を捉え得ぬことになる。けれども、その否定肯定がいかなる点について、いかなる立場からなされているかを考えてみると、決して矛盾でなくなるように思う。彼は一つの事物に対して、それを平面的形式にだけ見ようとせず、その事象を種々の立場から多角的に把握しようとしたものであることが判る。すなわち矛盾らしく見える論理的構造こそ「徒然草」の人間観の正しさではなかろうか。

「徒然草」の思想は第一に無常感である。不安な時代背景から推察すれば当然おこりうる思想である。今日、我々はともすれば多忙のゆえに自分の姿を見失いがちであるが、「命は人をまつものかは。無常の来ることは、水火の攻むるより速かに、逃れ難きもの。」「ふるき墳、多くはこれ少年の人なり。」「我等が生死の到来ただ今にもやあらん。」等々、現代に生きる我々にとっても、ひしひしと身がひきしまる思いがする。

また、日常生活のささいな事柄に関する教訓が多い。中でも私は社交に関するものが好きである。「物にあらそはず、己を枉げて人にしたがい、我が身を後にして人を先にするにはしかず。」「そのこととなきに人の来りてのどかに物がたりしてかへりぬる、いとよし。」「人をわかずうやうやしく、言葉すくなからん人にはしかじ。」彼の言うように応対できるかどうか疑問はあるが、私の理想に近い。

又学問に関するものも印象に残っている。「大きなる職をも辞し、利をもすつるは、ただ学問の力なり。」これこそ学問の本質だと思うし、向学心とはまさにこのようでなければならないと思う。今日の我々はこれとは反対の気持で学問をやっているように思えてならない。また「よき人」「やんごとなき人」「賢き人」などは生活態度上の典型であって、単に物知りとか、地位が高いとか、技能があるとかいうのであってはならないと思う。

私の生活態度とか考え方はこの書に負う所が多い。今後とも読み直しあらためて考えてみることも多いことであろう。

（鯖江市西番町5の53）

教育委員会賞　（婦人の部）

丹羽文雄作

「無慚無愧」を読んで

関　澄（主婦）

「恥づる」という気持を棄てることが人間らしく生きることだとばかり思っていた。大きな誤まりであった。逆だということが今わかった。

主人公蓮子は、大柄でおっとりと美しい白牡丹のような女である。冒頭、17才の時義兄に犯されながら、白痴のように恐れも羞恥も抱かずむしろその行為を楽

しむ場面があるが、この態度がその後に起こる数々の出来事に共通することになる。

一向宗の寺院に嫁いで若い僧と過ちを犯して離縁となり、再婚して料亭のおかみとなる。ここで夫に愛されて花が開くような女の盛りの時を持つが番頭との過ちが発覚して又離縁となる。この間、夫を含めていずれの男を愛したわけでもなく、単にことのなりゆきとしてそうなってしまう自分を、蓮子は「心と体が離れていて心が体のすることを傍で眺めている。それが私の余裕である」と思っている。いずれの出来事も「古証文を棚の上に重ねていく。」ように思われるのであった。

自分の産んだ子供に全く愛情を感じないし夫の女に対して嫉妬もしない無性格さが、寺の妻女でも料亭のおかみでもぴったり適応できる由縁なのか、周囲の人々には愛されている女である。

時代は「西南戦争」の頃であり、蓮子のふしだらは実家の面目にかけても許されないものであった。3度目に一向宗の寺に嫁する時は、蓮子にも相当の覚悟があって10年を立派に寺の妻女として過ごす。夫が死んで5年後初めて誰のせいでもなく自分の心と体の欲望につき動かされるように娘の婿に迎えた僧光尊を誘惑する。婚礼の晩、茶室で光尊を待つ蓮子にはかつての「余裕」はなかった。老いることのない蓮子の「白い凝脂」がその後もずっと光尊を求めつづけて、ついに娘は家出してしまい、光尊に疎まれ、寺を思う檀家の手で寺を追われてしまうことになる。

自からの罪は問わず、光尊と檀家の人々を呪いながらも、老婆達を相手にみよう見真似の法話をして暮らす蓮子にはあわれなこっけいさを感じた。やがて老いさらばえて半身不髄となり意識もないまま寺に連れ戻どされた蓮子は、あたかも死の機会を逸したものの如く昼となく、夜となく呻き声をあげつつ次第に腐れて死臭を漂わし初める。不断に続く呻き声は光尊を責めつづけ、広大な寺院建築のそこここにある暗闇の中の幽鬼をことごとく呼び起こすようなすざまじいものであった。

「寺の闇」の描写がしばしば出てくるが、「在家の闇」とは全く違ったその闇の中に何百年と続いた教団の数々の悪業を作者は見ているように思われる。

「善人なおもて往生をとぐ、況んや悪人をや」の言葉で有名な親鸞の教えは、自からの罪を徹底的に告発し、極悪非道の悪人であると自覚することを機縁として初めて、御仏の広大無辺の慈悲のありがたさに涙することができるというものである。

この教えを説き暮らしながら、ついに自からの罪を自覚することなく死んでいく蓮子に、人間の「したたか」を感じたが、同時に全く違ったもう一人の女の生と死を思い浮かべた。

芥川龍之介の短篇「六の宮の姫君」である。中流公家の娘と生まれ父母に愛されて育ったが、両親の死後は面倒をみてくれる男を捜してはその保護の下に喜こびも少なく悲しみも少ない生涯を送る。乞食となって朱雀門院で死ぬ間際「一心に念仏せよ」と勧める法師の努力も空しく「冷たい風ばかり、暗い中に冷たい風ばかり吹いて参ります」と死の影におびえつつ息絶えてしまう。その後、朱雀門院に淋びしそうな女の泣声が聞こるという噂に「あれは地獄も極楽も知らぬ腑甲斐ない女の魂でござる。御仏を念じてやりなされ。」という法師の言葉が、ぴしりと当る鞭のようにひびいてこの十余年間忘れることのなかったあの姫の生と死である。

蓮子の闇は、その白い凝脂が呻きつつ溶けこんでいくような濃密な寺の闇であり、姫君の闇は、うす墨を流したような枯野の闇であろうか。いずれも御仏の慈悲を信ずることのない一生であった。全く別の生き方でありながら、身に替えて愛し憎しむべきものを持たなかった故に慚愧することもなかったことでは同じである。それは、とりもなおさず人間らしく生きなかったということではないだろうか。

不そんであるかもしれないが、宗教とは、高遠な理想や哲学的思索の中から生まれたのではなく、愛し、憎しみ、喜こび、怒り、恥づるという極めて人間臭い所業の中から求められたのではないだろうか。そのことを感じる時、小心翼々と常識的な日常を送るものにとって、果して自からの罪が何であるかを問いただす厳しい自覚は、ついに生まれることはないのではないかと不安である。

（福井県三方郡美浜町けやき台）

教育委員会賞　（青年の部）

松　本　則　子　著

『父ちゃんのポーが聞える』を読んで

児　　玉　　修（学　生）

この本を読んで、まだ自分にも、少しは同情心といったものがあることが分り嬉しかった。体の中から何か分らないが湧き出てきて、のどの所が締付けられ、そうかと思うと目頭が熱くなり涙が流れてきた。

21年と５カ月で、普通の人ならバラ色であるべき青春時代の、その９年間も白い壁の中で過ごしてこの世を去った則子さん。運命と言ってしまえばそれまで、でも今の世の中には〝くだらない人間〟があまりにも多すぎるのではないでしょうか。私もその中の一人かもしれませんが。

本を読み終って暗闇の中で目を閉じ、この不幸な少女について考えて見ました。又、涙があふれ出て頬を伝わる。こんな気持ち一生忘れたくありません。

体の痛に耐えに耐えぬいて死を何度も考えていた彼女、その彼女の詩、技巧的にはどうか分りませんが、何か私の心を打つところがあります。

『うれしいこと　それは　お便所から出てくると
歩行器が部屋の方向にむけてあるとき　だれがしてくれるのか　しらないけれど　うれしい』　良い人がいる。彼女に代って私はお礼を言いたい「ありがとう」。

実際彼女の回りに良い人がいて良かった。「ヘサキ」というグループの出現、その中の「ノッちゃん」事、古川君に空想的な愛を抱き、手紙の交換をしましたが、すごく彼女の気持ちがよく表われていると思いますし、古川君の彼女に対する思いやりにも、本当に頭の下る思いです。彼の出現は則子さんにとって大きかった事は事実で、彼の為に生きなきゃー、という気持ちが彼女の寿命を延ばしたようにも思えます。

『あなたがいてくれるって　すばらしいことですね
愛することができるって　すばらしいことですね』
恋をした私、いや、恋をした人なら誰でも彼女のこの詩の心に、共鳴の鐘を打ち鳴らすのではないでしょうか。

『ポー　汽笛がこだまする　空に小さく　消えていく
午後４時45分ちょうど　父だ　父の引いている列車が
高山線を走っているのだ　ポー　胸の奥でひそかに
則子も声ない汽笛をあげる　涙が頬をこぼれ落ちた』

映画も見ましたが、この場面は一番心に響いたし、今でも目を閉じれば光景が浮かんできます。ジリリリリン、昨夜、仕掛けていたのでしょう、目覚時計が鳴る。父の乗った汽車がトンネルを出る。その上は則子さんのいる高志学園である。父が笛を鳴らす。ポーッ、ポッ、ポー、この、父と娘の心を結ぶ汽笛が印象的でした。ポーッ、ポッ、ポッポー、ますます病態の悪化、口も筆談もきかなくなり、そういう彼女の事が北日本新聞に書かれ、それを見て、山倉さんという牧師夫人が彼女を訪れます。山倉さんに、則子さんは、『詩は美しいものと思っていたのに　だんだんよごれていくみたいで悲しい。読んでくれる人がみんなあなたのようであればいいけど　おもしろいなんて読む人がいてはたまらない』と言っていますが、誰がおもしろいなんて読む人がいるでしょうか。こんなにも、ぼくの目を濡らした詩を……

彼女は、お茶を欲しい時でも『お・ち・や・を・お・ね・が・い・し・ま・す』と文字を辿り、そのお礼も『あ・り・が・と・う・ご・ざ・い・ま・し・た』と文字盤を指でさしていたそうです。何故こんないい人が、こんなに優しい人が――と思うと涙が取り止めもなくあふれてきて、もう、止まりませんでした。

『愛されるのは資格がいるけど　愛するのはいいでしょう？』この詩が彼女の最後の詩となり、３年前から橋本先生を通してのペンフレンドの千葉衛子という人にも会え、昭和45年７月26日午後７後５分、富山市郊外の古里保養園の一室で、一人寂しく、則子さんは、21年と５カ月の苦しかった生涯を終えました。彼女は喜んでいたかもしれません。もう苦しまなくて済むと……

私はこの本を読んで涙を流す程の感銘を受けました。そして私は、一つの身上の言葉も得ました。それは、『苦しみぬいたとうぬぼれてはならない　苦しみきれぬと　絶望してはならない　たえず苦しめ苦しみの上にあれ　そしてほほえめ　苦しみは波のようなものではないか磯岩をかむその波、波、海草を洗う波、波、』という則子さんの詩です。

いつも、苦しい時があったら思いだすでしょう。この言葉を、この不幸な松本則子さんという人を。

最後に、の本を読んでいない人に、是非一度読んでもらいたい。そして、次の人に、すすめてもらいたい。〝父ちゃんのポーが聞こえる〟という題の、このすばらしい本を。（福井市四ツ井本町103 中山重信方）